

特集 児童・思春期の感情障害を考える II

発達障害と感情障害

小林 隆 児

Japanese Journal of Psychiatric Treatment

Vol.7, No.9, Sep. 1992

Published

by

Seiwa Shoten, Co., Ltd.

精神科治療学

第7巻第9号 1992年9月 別刷

星和書店刊

発達障害と感情障害

小林 隆 児*

抄録：発達障害のなかでも特に広汎性発達障害に焦点を当てて、感情障害の合併に関する過去の研究を概観した。高機能自閉症や Asperger 症候群のなかに感情障害を合併しやすい一群があり、これらの例では感情障害の遺伝負因が濃厚な例が多く、遺伝的要因が示唆されている。さらに、彼らが青年期・成人期に達した時に、自らのハンディキャップに気づくとともに、低い自己評価から抑うつ状態や自殺企図を呈することが少なからずみられることを述べた。最後に彼らへの心理的援助が成長につれますます重要になってくることを指摘した。

精神科治療学 7(9); 961-965, 1992

Key words: *pervasive developmental disorder, autism, Asperger's syndrome, affective disorder*

はじめに

思春期前の子どもに躁状態や抑うつ状態を頻繁に繰り返す周期性精神病の発症がみられることはかなり以前から明らかにされる¹⁹⁾とともに、今日までその疾病学的位置づけをめぐる議論がなされてきた²⁰⁾。さらにうつ病またはうつ状態についても児童期に少なからず認められるとする共通認識が次第にわが国でも持たれるようになってきた。このように子どもにみられる感情障害の存在そのものは注目されるようになってきたが、発達障害、なかでもとりわけ広汎性発達障害の子どもでは自己表現能力の問題など彼らのハンディキャップが前景に認められるために、彼らの感情や心理状態は等閑視されやすく、彼らに生じる感情障害が着目されるようになってきたのはごく最近になってからであった。そのなかで彼らにも感情障

害が合併することは決して稀なことではないことが次第に明らかになってきた。

感情障害は彼らに深刻な事態を生むことが少なくない。したがって、その治療は発達障害のハンディキャップに対するリハビリテーションを効果的に行うためにも重要な要素であることから、発達障害に合併する感情障害の存在は今後もっと関心が払われる必要がある。そこで本論では発達障害と感情障害に関連する過去の研究を、主に広汎性発達障害を中心に自験例を交えながら振り返ってみたい。

I. 発達障害に合併する感情障害

1. 広汎性発達障害に合併する感情障害

1) 過去の報告例

広汎性発達障害の子どもたちに抑うつ状態や躁状態などの感情障害が起こることが明らかになってきたのは、一つには彼らの臨床経過を思春期、成人期まで追跡できるようになったことや自分の感情体験を言語化できるような軽症の自閉症（高機能自閉症）の臨床経過が蓄積されたことなどによるところが大であった。

Developmental disorders and affective disorders.

*大分大学教育学部

〒 870-11 大分県大分市大字旦野原 700)

Ryuji Kobayashi, M. D.: Faculty of Education, Oita University, 700 Dannoharu, Oita City, 870-11 Japan.

Wolff ら (1980)²⁰⁾は小児の分裂性人格 (Asperger 症候群とほぼ同義)の追跡研究から5%に自殺企図が認められたという。さらに、Wing(1981)¹⁸⁾は同じく広汎性発達障害に属する Asperger 症候群の追跡研究のなかで感情障害の合併が23%にもみられ、11%に自殺企図が認められたと報告し、彼らが思春期後期から成人期にかけて自分のハンディキャップや他者との違いに気づくことによって傷つき、抑うつ状態を呈するようになることが決して稀ではないことが明らかになった。このように自閉症の軽症ともみなされているこれらの子どもたちが思春期に入ってから非常に深刻な抑うつ状態まで呈することがあるということは、自閉症の予後がそれまで不良とされてきたことに加えてかなり衝撃的なことであった。わが国でも藤川ら(1987)²⁾が大学入学後の19歳時に抑うつ状態を呈して入院した Asperger 症候群の1例に入院中自殺企図がみられたという類似の症例報告を行っている。

その後自閉症の子どもの中にも感情障害の合併例が存在することがいくつか報告されるようになってきた。Komoto ら (1984)¹²⁾や薄井ら(1989)¹⁷⁾は思春期前の8~10歳時に発症し、躁状態と抑うつ状態を周期的に繰り返す3例を報告した。その後 Gillberg (1985)⁵⁾は8歳頃に同じく抑うつ昏迷状態を頻回に繰り返す男児例を報告した。小林ら(1989)⁸⁾は前思春期に強迫症状を呈し、その後12歳になって次第に抑うつ状態、さらには軽躁状態を繰り返すまでに至った折れ線型自閉症の1男児例を報告しているが、この症例はその後

十二指腸潰瘍を合併するなど治療は難治を極めた¹⁰⁾が、家族療法により軽快していったことがその後の報告で明らかにされている⁷⁾。最近では Ghaziuddin ら (1991)³⁾がダウン症と自閉症の合併例にみられたうつ病の1例を報告し、うつ病の診断が見過ごされやすいとして注意を喚起している。今までに行われたこれらの報告をまとめて表1に示した。

2) 広汎性発達障害における感情障害の頻度

以上の報告でも分かるように、いまだ感情障害の合併については症例報告が主であるが、自閉症にどのくらいの頻度で感情障害がみられるかについては、先に述べた Wolff ら²⁰⁾と Wing¹⁸⁾の報告があるのみである。最近では小林ら(1990, 1991)^{6,9)}が187例の青年期・成人期自閉症の行動特徴を保護者の記載によって調査し、言語発達水準の高い自閉症に出現しやすい行動特徴として、抑うつと関連の深い項目「自分には価値がないと感じたり、劣等感がある」(13.9%)、「くよくよする傾向がある」(10.7%)、「罪悪感をもちすぎる」(6.4%)などが認められたことを述べ、劣等感や罪悪感をもつ自閉症の存在が少なくないことを指摘し、この時期になっても高い自己評価をもてず苦悩している彼らの姿を推測している。

3) 病像の特徴

Komoto ら^{12,17)}の症例では周期性精神病の病像を呈し、躁状態と抑うつ状態を周期的に繰り返し、抑うつ状態の際には、寡動、昏迷など強い精神運動制止がみられ、躁状態では活動性の亢進と抑制欠如がみられるなど比較的明らかな躁うつ病状態

表1 広汎性発達障害に感情障害が併発した症例に関する報告例

| 報告者 (報告年) | 性 発症年齢 | 臨床診断 | 感情障害の病像 | 有効薬物* | 感情障害の遺伝要因 | その他 |
|-------------------------------------------------------------|---------------------------------------|------------------------------|------------------------------|-------------------------------|------------------|--------|
| Wolff ら(1980) ¹⁹⁾ Wing(1981) ¹⁸⁾ | 22例中(男のみ) 34例中(男28, 女6) | 分裂性人格 Asperger 症候群 | 自殺企図5例 感情障害23% 自殺企図11% | ? ? | ? ? | |
| Komoto ら(1984) ¹²⁾ 薄井ら(1989) ¹⁷⁾ | 3例 { 男 9:01 女 10:09(初潮前) 男 8:11 | 自閉症 自閉症 | 躁+抑うつ 躁+抑うつ | CBZ CBZ+PHT | - - | てんかん合併 |
| Gillberg(1985) ⁵⁾ 藤川ら(1987) ²⁾ | 男 8(?) 男 19:08 | Asperger 症候群 Asperger 症候群 | 躁+抑うつ 抑うつ+自殺企図 | LiCO ₃ +CBZ HPD | + (父系) ++(父系) | |
| 小林ら(1989) ⁸⁾ Ghaziuddin ら(1991) ³⁾ | 男 12:05 男 16(?) | 自閉症(折れ線型) Down 症+自閉症 | 躁+抑うつ 抑うつ | CPM+HPD fluoxetine | - - | |
| 小林 (今回の報告例) | 女 12:05(初潮前) | 自閉症 | 躁+抑うつ(?) | LiCO ₃ +LPZ | ++(父系) | |

* CBZ: carbamazepine, PHT: phenytoin, CPM: clomipramine, HPD: haloperidol, LPZ: levomepromazine

を呈しているが、成人の躁うつ病に伴う誇大念慮(妄想)や罪責念慮(妄想)はうかがわれない¹¹⁾。

Gillberg⁹⁾の症例では、抑うつ昏迷状態を思わせる病態が繰り返され、その際には排尿、排便の生活習慣から興味の関心一切まで失われ、常同反復行為のみ繰り返すほどの病的退行を呈している。

これらの症例は内分泌学的異常を中心とした生物学的要因の強く関与した周期性精神病^{16,20)}と類縁の病態とみなされようが、Asperger 症候群に認められるような抑うつ状態では自責感、抑うつ気分さらには自殺念慮を伴うこともあり、前者よりも心因の関与が強い病態であると考えられる。

4) 薬物治療

表1にまとめたように、双極性感情障害ではLiCO₃の使用が最も多く、その他には carbamazepine, haloperidol, clomipramine などの薬物が効果があったと報告されている。

2. 広汎性発達障害と感情障害との関連性について

Gillberg ら (1981)⁴⁾ は自閉症の一部に思春期に入って急速に退行する例があることを述べ、これらの群は自閉症の中でもある特殊な一群として位置づけられる可能性があるとともに、これらの例の家系内に感情障害の遺伝負因が高率に認められることを報告した。その後、Gillberg (1985)⁵⁾ は先に述べた周期性精神病の1例の家系内にも感情障害の遺伝負因が強いことから自閉症と感情障害の関連性に着目するようになった。

その後、自閉症と感情障害との関連性については、遺伝学的観点から研究がなされるようになってきた。DeLong ら (1988)¹¹⁾ は自閉症の中でも高

機能自閉症群に感情障害と Asperger 症候群の家族歴を有するものが多いことから、Asperger 症候群と感情障害が遺伝学的に強い関連をもっていることを示唆し、高機能自閉症は低機能自閉症とは成因論的に異なっている可能性を報告した。Piven ら (1990, 1991)^{13,14)} は 37 例の自閉症の同胞 67 例の中で感情障害の治療歴を有するものが 10 例 (15%) に認められるとともに、42 例の自閉症の親 81 例の中で 22 例 (27%) にうつ病がみられたと述べ、一般人口での発症率に比して自閉症の親族にかなり高率に感情障害が発症していると報告した。これらの報告から自閉症、なかでも高機能群ないし Asperger 症候群のなかに感情障害と関連性の深い一群の存在の可能性が示唆されているが、これらの要因が自閉症の成因といかなる関連性があるかについては今後の研究の課題である。

II. 症例呈示

以上、自閉症ないしその近縁群の感情障害合併に関する研究の流れを概観してきたが、つぎに最近筆者が治療した自閉症の女兒で、家系内に感情障害(双極性躁うつ病)の濃厚な遺伝負因が明らかになった例を経験したので呈示する。

初診時 13 歳、女兒

家族歴 父は躁うつ病で現在も加療中。父系親族に躁うつ病の発症が多くみられる(図1)。母と大学生の姉は健康。

発達歴 妊娠初期に貧血のため増血剤を服用し

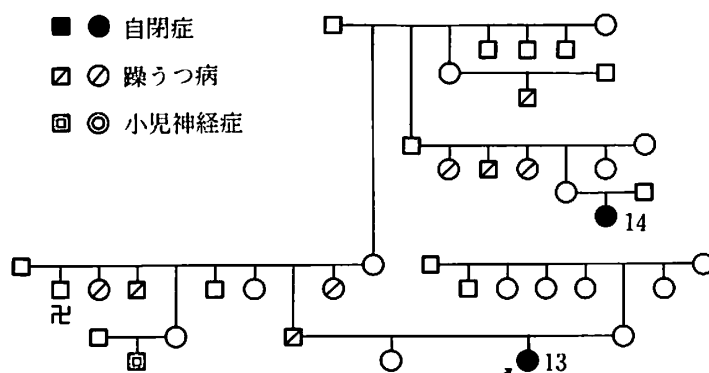


図1: 症例1の家系図(母の陳述による)

たことはあるが、すぐに止めた。その後の経過は順調で、満期で吸引分娩。仮死はなかった。生下時体重は3,360 g。母乳栄養。新生児期異常なし。乳児期、身体運動発達は順調で、あやすとよく笑っていたが、母へのあと追いはみられなかった。母がいなくても平気で、誰にもなつかなかった。発語は遅く、母も本ばかり患児に与えていた。2歳8カ月頃には「ワン、ツー、スリー」と真似して言ったり、アルファベットをすぐに覚えるようになった。しかし、話しことばがみられだしたのは3歳5カ月の時で、「パパ、ママ、プー、ウンマ……」などがやっと言えらるようになった。この頃から保育園の障害児クラスに通い始めた。

小学校1～4年は特殊学級に入級。2年までほとんど人に話すことはなかったが、2年の終わりに話し始め、その後次第に話しことばが増えていき、5年で普通学級に転級できるまでになった。しかし、クラスになかなかなじめず、側頭部、さらに頭頂部にまで抜毛が出現した。少しずつなじむようになって抜毛は軽快していった。教科では社会と算数は平均ないしそれ以上の成績だったが、その他の教科はよくなかった。父は患児の行動に対してすぐ叱責したりなぐったりするため、患児は父をひどく怖がっていた。

小学4年当初から落ち着きがなくなり、よくしゃべったり笑うようになった。6月の数週間特にひどかった。しかし、5～6年時、患児が怖がっていた父が仕事の都合で単身赴任をしたこともあってこの頃は比較的落ち着いていた。6年の夏休みに初潮発来。以後の月経は不規則で、月経開始直前から情緒は不安定になりやすい傾向があった。

中学校も普通学級に入学したが、1年の6月、陰湿ないじめを経験した。そのため学校をとて嫌がり、「いやだ、いやだ」と盛んに訴えていた。数週間とても落ち着きがなかった。学校にもなかなか慣れず、抜毛が再び生じて、夏休み直前まで続いた。教師と生徒の間でトラブルがよく起こるほどに学校が荒れていた。2学期の終わり頃、そのような現場をみてから「あの子たちと同じように暴れるからね」と言い出し、患児も乱暴な行動をとるようになった。多弁で荒々しい行動がみら

れ、些細な刺激ですぐに笑いころげたり、突然思い出し笑いをするなど躁状態を思わせる状態を呈してきた。2年になっても続くため6月、当科に受診となった。

幼児期から自動車が好きだったが、この頃は自動車販売店に行っては新車を見て回ったり、アイドルに熱を上げ、外出を繰り返している。母から何かで注意されると「そんなに怒るんなら、かっこいい男の子の車に乗ってついてゆくから」と異性への関心が高まるとともに母親への反抗的態度が強まってきている。

現症 身長156.5 cm, 体重50 kg。視線回避と閉眼行動とともに、易刺激性、気分爽快感、多弁、思い出し笑いなどが認められるなどの躁状態で、頭頂部に拇指等大の抜毛部が存在し、食毛症もみられた。知能検査結果はWISC-RでTIQ 83 (VIQ 61, PIQ 111), 全訂版田中・ビネ式でIQ 62であった。

治療経過 LiCO₃ 400 mg/日投与による薬物療法を開始。800 mg～1200 mgで次第に効果がみられ数カ月後には落ち着きもみられるようになった。

しかし、中学校卒業後、入学した養護学校では、自分が行くような学校ではないと主張するなどここでも適応困難で、奇声をあげて興奮するため、不安定になりやすく levomepromazine 投与が必要な状態が続いている。

小括 本症例は、父、叔父、叔母など親族に躁うつ病の発症が8例みられるとともに、又従姉妹に自閉症の発症もみられるなど、感情障害と自閉症との遺伝学的関連を強く示唆する家系を有している。そして本症例の病態も主に躁状態を呈していた。LiCO₃ 投与によって一時的には改善したが、その後も環境の変化に反応しやすいなど経過はあまり好ましくなく、今後も増悪の危険性をはらんでいるため、注意深い観察が必要な症例である。

おわりに

広汎性発達障害に焦点を当てて感情障害の合併に関する研究の現況について概観してきた。自閉

症, そのなかでもとりわけ高機能自閉症ないし Asperger 症候群に感情障害の合併しやすい一群があることが次第に明らかになってきているが, それとともに自閉症児が青年期・成人期に達した時に自分のハンディキャップに気づくと罪悪感や自己評価の傷つきやすさから抑うつ状態を呈し, ついには自殺企図さえ起こしかねないことも分かってきた。彼ら自身が自らの対人共感性の困難さに苦悶している¹⁵⁾ことを考えると, 自閉症を中心とした広汎性発達障害の子どもたちへの心理的援助は, 彼らが成長していくにつれますますその重要性は高まってきているといえよう。

文 献

- 1) DeLong, G. R. and Dwyer, J.: Correlation of family history with specific autistic subgroups: Asperger's syndrome and bipolar affective disease. *J. Autism Dev. Disord.*, 18; 593-600, 1988.
- 2) 藤川英昭, 小林隆児, 古賀靖彦ほか: 大学入学後に精神病的破綻をきたし, 抑うつ, 自殺企図を示した19歳のAsperger症候群の1例. *児精医誌*, 28; 217-225, 1987.
- 3) Ghaziuddin, M. and Tsai, L.: Depression in autistic disorder. *Br. J. Psychiatry*, 159; 721-723, 1991.
- 4) Gillberg, C. and Schaumann, H.: Infantile autism and puberty. *J. Autism Dev. Disord.*, 11; 365-371, 1981.
- 5) Gillberg, C.: Asperger's syndrome and recurrent psychosis—A case study. *J. Autism Dev. Disord.*, 15; 389-397, 1985.
- 6) 小林隆児: 青年期・成人期の自閉症. *こころの科学*, 37; 50-57, 1991.
- 7) 小林隆児: ある成人期自閉症者の強迫症状と家族病理. *精神医学*, 34; 365-371, 1992.
- 8) 小林隆児, 村田豊久: 自閉症と感情障害—抑うつ状態と軽躁状態を繰り返した年長自閉症の1例—. *精神医学*, 31; 237-245, 1989.
- 9) 小林隆児, 村田豊久: 201例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題. *発達心理学と医学*, 1; 523-537, 1990.
- 10) 小林隆児, 田坂健二: 消化性潰瘍を呈した自閉症者の1例. *精神科治療学*, 4; 213-219, 1989.
- 11) 古元順子: 自閉的な発達障害に併発する精神科的問題—感情障害(気分障害). *発達障害研究*, 11; 14-19, 1989.
- 12) Komoto, J., Usui, S. and Hirata, J.: Infantile autism and affective disorder. *J. Autism Dev. Disord.*, 14; 81-84, 1984.
- 13) Piven, J., Gayle, J., Chase, G.A. et al.: A family study of neuropsychiatric disorders in the adult siblings of autistic individuals. *J. Am Acad. Child Adolesc. Psychiatry*, 29; 177-183, 1990.
- 14) Piven, J., Chase, G.A., Landa, R. et al.: Psychiatric disorders in the parents of autistic individuals. *J. Am Acad. Child Adolesc. Psychiatry*, 30; 471-478, 1991.
- 15) Rutter, M.: Cognitive deficits in the pathogenesis of autism. *J. Child Psychol. Psychiat.*, 24; 513-531, 1983.
- 16) 高木隆郎: 前思春期における周期性精神病について. *精神経誌*, 61; 1194-1208, 1959.
- 17) 薄井省吾, 古元順子: 思春期に感情障害を発症した自閉症の3症例について. *岡山大学教育学部研究集録*, 64; 69-75, 1989.
- 18) Wing, L.: Asperger's syndrome: A clinical account. *Psychological Medicine*, 11; 115-129, 1981.
- 19) Wolff, S. & Chick, J.: Schizoid personality in childhood: A controlled follow-up study. *Psychological Medicine*, 10; 85-100, 1980.
- 20) 山下 格: 若年性周期性精神病. 金剛出版, 東京, 1989.